

---

# とある家族の非日常？（もしくは只の日常生活）

緋翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある家族の非日常？（もしくは只の日常生活）

### 【Nコード】

N0383P

### 【作者名】

緋翠

### 【あらすじ】

とある家族の非日常を描いた作品です。

ほのぼのとした話で書いていきます。

ネタが多少でもかも？

更新は出来るだけ早くしたいです。

「……ちなみに、とあるシリーズは全く関係ないぞ」

この小説は基本一話携帯で二ページ分の分量です

注：タイトル変更しました

## ある日の日曜日

「…………おはよう。」

「あら、おはよう刹那。今日は日曜なのに早起きね?」

「…………目が覚めたから」

俺は母さんに挨拶してリビングの冷蔵庫にある牛乳をとる。

「ふうくん、まあ良いわ。今日何か予定あるの?」

「無い」

「そう」

一旦会話が切れる。

すると

「オッハヨー!! 今日もいい朝だね!」

「おはよう桜、今日の朝食はホットケーキが良いなあ。」

「母さん、朝からホットケーキは重くない？刹那、お姉ちゃんに挨拶は無いの？」

うるさい姉だ。

「…………おはよう」

「テンション低いなあ…………もうちょい明るく挨拶しようよ。」

「まあ良いじゃない。さて刹那、凜と彰を起こしてきて」

「分かった。」

これは…………ミッションだ！！（刹那には日常で頼まれ事をされることが何でもミッションにちゃうイタイ子です。）

「ミッション…………スタート」

俺はまず双子じゃないが同じ学年の弟、彰を起こしに行く

桜姉は朝食の準備中だ

コンッコンッ

ドアをノックする

「……………彰、朝だ」

返事がない

寝ているようだ

コンッコンッ

もう一度ノックする

「……………彰……………朝だ。起きろ」

返事がない

まだ寝ているようだ

まだ凜を起こさなくてはいけないのに

「……………こんなところで時間を掛けるわけには……………」

こうなったら最終手段しか

（刹那は最終手段とか良く言いますがいろんな方法があります）

ドアを開け中に入りベッドに寝ている彰に近づく

ガチャッ

何処から出したのか刹那の右手には黒く光る何かが握られている。

「……………刹那、目標に接近……………あと三秒以内に目を覚まさない場合、砲撃を開始する。」

三

二

一

バンッ

「イツ、な、何するんだ兄さん!!」

「……ようやく起きたか」

エアガンで頭を撃たれてようやく目が覚めた彰

「……ミッションをフェイズ2に移行する」

部屋からすぐに出て次のターゲットに向かう。

その後彰が聞いたのは二度目の発砲音だった

## 登場人物紹介（前書き）

新たに連載始めてしまいました。

頑張っ て行きます

オリジナルは初めてなので見苦しいかも知れませんがどうか宜しく  
お願いします。

## 登場人物紹介

主人公的な立ち位置

石田 刹那

男

ガンダム00のアニメを見て刹那にはまったイタイ子

石田家の長男

頼まれ事を全てミッションに例える。

エアガンを常に携帯している

何かをやり遂げると

「俺が、ガンダムだッ!!」

と吠える。

複数人の場合“俺たちが”になる。

学校では無口の……と言うよりシャイで口下手な子です。  
内面は凄く明るい

外見

ガンダム00の刹那（1stシーズンの）

誕生日

4月7日

石田 桜

女

石田家の長女

家族の中で一番のしつかり者

刹那の事を可愛がっている

石田家の食事は大体彼女が作っている。

外見

ガンダムSEEDのラクスの髪を黒色にしただけ

誕生日

5月16日

石田 彰

男

石田家の次男

刹那の弟で苦勞人。

学校では同じクラスの兄と幼なじみの二人に振り回されている。

外見

SEEDのアスラン

誕生日

1月25日

石田 凜

女

石田家の次女

元気一杯な妹、大事な場面では良くミスをするドジッ娘 だけどそこは明るさでカバー

外見

F a t eのあかいあくま

誕生日

6月5日

母

石田家の母

良く分かん人

石田家の中では頂点に君臨している人

名前はまだ決まっていない。

外見

S E E Dのマリユー

誕生日

6月9日

父

詳細不明

保志 総一郎

男

隣の家に住んでいる双子の長男で刹那の幼なじみ

腹黒い。

シスコン

桜を狙っている。

勉強、運動何でもござれの超人  
しかしイタズラ好き

刹那と一緒に良く彰を困らせる

外見

SEEDのキラ

誕生日5月18日

保志 椿

女

刹那の事が大好きな恋する乙女（気付いてもらえないが）

総一郎とは双子の妹

刹那の一番の理解者

ヤキモチ妬き

しゃべり方が古風……と言っより上から

外見

FF8のリノア

誕生日

総一郎と一緒に

藤原雪乃

女

クラスのリーダー

周りから委員長と呼ばれることがあるが本人は嫌がっている。

刹那のことをちょっと気にしてる。女の子

外見

TF5の藤原雪乃をちょっと幼くした感じ

誕生日

3月8日

鈴波 絆

刹那にラブレターを出した女の子  
緊張すると良く噛む  
身長と胸が無いのが悩み

外見

キヨ子

誕生日

12月4日

これからも増やして行きます。

## 椿の毎朝

「ふっふん」

おはようございます椿です

初登場ですヒロイン（予定）です!!

いつか予定を消すのが目標です!!

さて私が何をしているのかというと

愛しの刹那にお弁当を作っています。

まあついでに総一兄さんや彰の分も作ってあげてるんですが……

学校のお弁当を隣の幼なじみに作ってあげるのってロマンですよね  
!!

おっと、そんな事を言っている間に出来てしまいました。

あとは盛り付けて……

「完成!!」

あとは刹那のご飯に玉子そぼろでハートをつけて……

「椿特製愛情弁当!!」

ガチャッ

「おはよう椿」

兄さんが起きて来ました。

「おはよう総一兄さん」

「うん……今日のお弁当は……唐揚げ、イモサラダ、チーズ入りハンバーグにキャベツの千切り……誰かの好きな物だらけだね?」  
苦笑いで兄さんが言ってきた。

「当たり前でしょ!!誰のために作ってると思ってるのよ?」

「僕」

「違う!!刹那のため!!」

「これだけやって気付いてくれないのに良くやるね」

いつか気付いてくれます!!

……気付いてくれるよね?

一方その頃石田家は

「兄さんその醤油取って」

「……………」

黙って醤油を彰に渡す

「今日のお弁当にかな?」

「……………さあな」

毎日好きな物しか入って無いから楽しみだ

「お兄ちゃんって椿姉の気持ち気付いてるの?」

変な事を凜が聞いてきた。

「……………何が?」

「ダメだこりゃ?」

ムッ

俺以外の家族が肩を落としているが俺が何に気付いていないと言っ  
んだ？

「桜姉さん……何を気づけばいいんだ？」

「さあ？自分で考えな。じゃないと椿ちゃんがかawaiiそつだ。」

うゝん

そうか！

「……椿は」

「気付いたの？兄さん」

「お弁当に何時も嫌いな物を入れているのか？」

「『『『ハァー』』』」

（こりやまだまだ掛かりそつだよ椿）

彰はそう思った。

保志家では  
「クシユツ」

「どうした椿？風邪か」

「いや、誰かが噂しているんじゃないかな？」

「フーン」

さて学校に行きますか

「じゃあ総一兄さんの弁当ね」

お弁当の一つを渡す。

「ありがとう。」

「じゃあ行きましょう」

そうして家を出る

## 彰の苦勞

こんにちは

彰です

今学校に向かっている途中です。

「……………」

「……………」

毎日登校してて思うのはなぜ兄さんはこんな無口なのか？（刹那の内面が明るいことに気付いているのは椿と桜だけです。）

どうにかして普通に話せる様になければ

とりあえず今兄さんは何を考えているんだろ？

今日の学校についてかな？

く正解く

（今日は体育がある日だ！今日こそ総一郎に勝つてやる。それにしても最近面白いアニメがやらないなあ。何か面白いこと起こらないかな？）

~~~~~

うんきつと何か難しいことを考えてるんだな。

って気付けば学校に着いちゃった。

結局今日も会話無しか……

もう少し兄弟のコミュニケーション取ろうよ！

「おはよう刹那、彰」

「……ああ」

「おはよう総一郎」

土間で総一郎に会った。

「今日の体育は勝負だからね刹那！」

「……………良いだろう。」

キョロキョロ

ん？兄さんが周りをキョロキョロ見始めた。

「どうしたの兄さん？」

「…………別に」

「ああ、椿なら部活の朝練に行つたよ。」

「…………そうか。」

総一郎よく兄さんの言いたい事がわかるね。

「じゃ、教室行こうよ。」

「ああ、行こ兄さん」

そうして教室に向かった。

教室で

ガラッ

「おはよう」

教室に入って挨拶をする

まあ普通だな。

「刹那君おはよう」

「……委員長か、おはよう」

委員長が挨拶をしてきた。

「刹那君。私委員長じゃないって何回言えばわかるのかな？」

「……」

「何でそこで黙るのよ？」

委員長じゃ無かったのか！？

「に、兄さんなんか言ったら？」

彰……弟を心配させるなんて……

兄失格だな

「すまないな雪乃。」

「／／／ナツ！！行きなり呼び捨て！？」

ムッ駄目だったか？

「……まあ、でも刹那君なら……」

「何か言ったか雪乃？」

「駄目だよ刹那、行きなり女性を呼び捨て、しかも下の名前です。で。」

そうだったのか？

アニメだと好感度がよく上がるパターンだったんだが……

「……悪いな藤原」

「エッ！？別に気にしないから良いけど何時も委員長って呼ばれるよりは良いから。」

「兄さんはこうやって女子を落として行くんだね。」

「さすが、刹那だ。」

誉められている。嬉しいな。

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

座らないとな。

「……席に戻る。」

「そうだねチャイム鳴ったし……委員長も席に着いたら？」

「保志君！！君が委員長を広めたのかな？」

ムッ

どこかめんどくさい予感がする。早く席に戻ろう。

「嫌だなあ、僕じゃ無いよ。」

「じゃあ誰よ?」

「彰」

彰……

「……ちゃんと名前で呼んでやね。」

「僕普通に名前で呼んでるよ!」

ガラッ

ドシドシドシドシ

何かが近づいてくる。

「おはよう刹那!」

「……………椿か……………おはよう。」

だが行きなり後ろから抱きつかないでくれ。

その……………いろいろ当たるだろ？

「ん？どうしたの刹那」

「いいから降りろ。」

「何でよ。」

「迷惑だ。」

嬉しいけどね。

「刹那く人の妹に対してその言い方はどうかな？」

あれ？

総一郎が怒ってる？

もしかしてシスコン魂に火が着いた？

俺ピンチ

かくなる上は

「……刹那ミッションを開始する。」

担任が来るまで逃げる。

「待て刹那!!」

うわーん追いかけてくる〜

椿side

「椿、兄さんを助けてくれる?」

「当たり前です。」

彰に言われなくてもやる気でした。

「総一兄さん!!」

ピタッと刹那を追いかけるのを止める兄さん

「な、なんだい椿？ 今僕は刹那を肅清しなければならぬ使命があるんだが……」

「そんなことしたら二度と口を聞きません。」

「どうもすみませんでした。」

s i d e o u t

彰 s i d e

はやっ!?

総一郎を簡単に押さえれるね。

それだけ相手の事が分かってるんだろうね。

羨ましいなあ。

僕は兄さんの事あまりわかんないから……

「……………彰」

「ん？何兄さん？」

「……悩みがあるなら相談にのるぞ？」

全くこの人は

「大丈夫だよ兄さん悩みなんて無いから」

まあ悩みじゃなくて欲だしね

さて先生もきたし

そろそろ席に着こうかな？

## 授業 国語

「……………暇だ」

遊びたい、動きたい、本読みたい！！

「まあ確かにね。」

総一郎もそう思うだろう？

「兄さんたちも真面目に授業受けたら？」

……………彰

「……………真面目に受けなくても点はとれる。」

俺のテストの平均点を知っているだろう？

「まあ確かに僕達二人は真面目に授業受けなくてもどうにかならね。」

「……………なんでうちのクラスの一位二位は、こいつらなんだろ？」

彰、聞こえてるぞ。

「……………国語は母国語だろ」

「その通り、だから普通勉強しなくてもとれるよ?」  
「それは総一兄さんと刹那だけよ。」

椿か

「……………そうか?」

普通だと思ってたんだが…………

「って言うかあなたたち、今授業中って事気付いてるの?」

雪乃……………そんなこと言われなくても

「……………ああ、知っている」

「……………なら静かにしなさいよ。」

邪魔をしたのかな?

「悪かったな。」

「フンッ」

「……………お前らも前向いて座れ」

「分かった。」

まあ総一郎たちもこういつ時はすぐ動いてくれるからいいね。

それから二十分たち……

「……………」

眠い……

昨日夜遅くまでゲームやったせいか凄く眠い。

チョンチョン

「……………」

背中を突っつかれる

チョンチョン

「……………なんだ総一郎」

「一回で反応してよね。眠いでしょ？」

よく分かるな

「ああ、ちよつと寝るのが遅かったからな。」

「フーン、じゃあ眠気覚ましにマルバツゲームとお？」

マルバツゲームか……

「良いだろう。」

「よし、じゃあ」

「保志君この問題を解いてくれ。」

いきなり国語の教師から声がかかった。

「はい。（ゴメンね刹那。また後でね）」

「……（分かったよ）」

そうアイコンタクトをかわす俺たち

前の黒板に問題を解きに行った総一郎

ヤバイ、また眠気が……

すると隣から

「良いよ。寝ても」

椿？

「ちゃんと当たったら起こしてあげるから。」

ありがたい。今の俺には椿が天界の女神に見えるよ

「……ありがとう」

「うん、お休み」

「ああ」

そしてチャームになるまで俺は寝ていた。

## 休憩

キンコーンカーンコーン

チャイムがなった。

「……………休憩だ。」

「刹那、椿、外に行こー!!」

「総一郎僕は!?!」

「アハハ、勿論彰も。」

「……………十分しか時間無いんだぞ」

むしろこんな話をしているだけで時間は過ぎるんだ。

行くなら行くで、早く行動すべきだろ。「刹那はなにしたい?」

俺か?

「椿もいるんだろう……………ならキャッチボールで良いんじゃないか?」

「僕サッカー!!」

「総一兄さんサッカーは四人じゃ出来ません。」

「パス回しぐらいなら出来るよ。」

「彰は黙ってて。」

「酷い!!」

「私はキャッチボールが良いな。」

「椿と刹那が同じ意見ならそれにしよう。」

「……総一郎」

「どうしたの刹那？」

非常に言いにくいんだが…

「……後五分しか無い上に……」

時間はまあいい。

問題は……

「……ボール、もう他の奴等が持って行ったぞ」

「エエ!？」

ドンッ

「そんな……なら僕達は一体何をすれば良いんだ!？」  
壁を殴りながら悔しがる総一郎

そんなに悔しい事か？

「世界は何時だって……優しいとは限らない……」

彰？

お前も何でそんなに落ち込んでいるんだ？

「私達が来るのが……遅かったから？」

いや、確かに俺達が来るのが遅かったからなんだが……そんなに落ち込む必要があるのか？

こうして悔し涙を飲みながら（刹那以外）休憩は終わりを告げた。

## 昼食

キーン「終わった〜！！刹那〜お弁当の時間だよ〜」

「……そうだな。」

僕はチャイムが鳴った瞬間に、刹那に声をかけた。

さて、我が妹の作ったお弁当を渡すかな

「はい、今日のお弁当」

「ありがとう総一郎」

「……ありがとう」

彰と刹那に渡し終えたら、机を並べて

「「いただきます。」」

「……いただく」

三人で仲良く食べ始める

椿？

ああ、椿なら昼食は何時もクラスの仲のいい女子と一緒に食べているよ。

え？

何で一緒に食べないのだった？

いくら僕がシスコンでもそこまで一緒にいないよ。

さて、刹那の反応は

「……モグモグ」

何食わぬ顔で食べているよ？

僕の視線に気づいたのか

「……どうした総一郎？嫌いな物でもあったか？」

「いや、なんでもないよ。」

こうゆう視線には鋭いのに何故妹の気持ちに気づかないのか……

「不思議だ」

「何がだ？」

「様彰からも気づいて貰えるよう頼んでいるのだが……」

「兄さん、唐揚げいる？」

「……貰う。」

彼は余り頼りにならないし……

「総一郎今なにか失礼なと言わなかった。」

「言っていないよ。」

「思ったけど……」

「はあ」

「何時になったら妹の気持ちは報われるんだか……」

「答えは」

「神のみぞ知るってね」

さて、真面目に食事しますかね？

告白？ その1（前書き）

なんか……最後に刹那がとても痛い子になります。

## 告白？ その1

昼休み中

昼食を食べ終わると

「／／／あ、あの刹那君」

「……なんだ？」

名前も知らない女子がやって来た。

「これ！！受け取ってください。」

そう言って手紙を渡してくる。

「受け取るのは良いが顔が赤いぞ……大丈夫か？」

「／／／だ、大丈夫でひゅ、か、噛んじった……」

「……（可愛いな。）」

噛み口調、チビッコ、貧乳ポニーテール

ツボ押さえてやがる……

「では！！」

そう言って去っていく。

「刹那く何もらったの？」

ニヤニヤしながら聞いてくるな総一郎

「……手紙だ」

「まさか、恋文？」

キラリ

そんな効果音が聞こえて来そうなぐらい目を輝かせるな

第一あんな可愛い娘が俺みたいな無口、オタク、シャイの三拍子揃っている俺に恋文なんか送るか

「……違う」

「え？じゃあなに？」

これは間違い無く

「……果たし状だ。」

ズルッ

凄いな総一郎

良くそんな漫画みたいな転び方出来るな

「刹那……君はもつと女心を勉強したほうが良いと思うよ……本気で」

「……椿に対していろいろやっているお前に言われたく無いな」

「その意見僕は総一郎に賛成かな？」

彰……お前

「……居たのか？」

「最初から居たさ……！」

まあいい。

とりあえず……

「……読んでみるか」

えゝとなになに

《いきなりのお手紙すみません。しかしどうしても伝えたいことが

ありまして。あの……今日の授業後に11Bの教室に来てもらえませんか？ 鈴波 絆

ほら見た事か

果たし状じゃないか

「どう見てもラブレターじゃない。誰から貰ったの刹那」

「……椿、のぞき見は止める。後これは果たし状だ。」

「刹那に果たし合いを挑む理由が分かんないわよ。」

「ウンウン」

お前ら……

それはきつとあれだよ。

あの……俺が無口で気に入くないんだよ

「無口って……そうね。刹那知らない人から見たら無口って言われるかもね。」

「……ねえ椿？」

「なに？総一兄さん」

「今刹那にか喋った？」

あれ？

口に出して無かったか？

「目がそうやって言ってたの。」

「凄いな椿は……僕も兄さんをそんな風に理解したいよ。」

「で、刹那はこの手紙どうするの？」

「……とりあえず指定された時間に会いに行く」

「ふーん（総一兄さん、彰、分かってるわね？）」

「なら良いんじゃないか？（分かってるよ。見張れば良いんだろ。）」

「行つてらっしゃい（椿…兄さんの事になるとほんとに変わるな。）」

三人が目を合わせて頷いた。

なに考えてるんだ？

とりあえず授業後までは、暇だな。

果たし合いか……

女子と果たし合いなんて……出来るのかな？

いや、もしも後に残る傷を付けてしまったら

~~~~~

『良くも私に傷を付けたわね！！』

『……………』

『もうお嫁に行けない！！』

『……………スマン』

『責任取って……………』

『……………ああ』

~~~~~

こんな事になったら!?

そして時間は過ぎていった

## 告白？ その2

授業後

さて、呼び出された教室に来てみた。

のは良いんだが…

「まだ、帰りのHRの時間なのか？」

教室にはクラスメイト全員が居た

その全員が真面目に先生の話聞いている

「……」

この空気の中一人で入れというのか……

俺には……無理だ。

第一自分のクラスの教壇に立つのにも凄い緊張するのにこんな他クルスのしかも全員に注目されるこの状況に俺が……入れるわけがない

なんて刹那が葛藤している所を総一郎達が見ていた。

「あれ、なに考えててると思う?。」

「十中八九、どうやってあの空気の中入ろうか、ですね。」

「椿ってなんでそんなに兄さんのことは自信満々で答えるの?。」

「決まってるじゃないですか。」

「なんで?。」

「彰、それを聞くのは無粋だよ。言わなくても分かるでしょ。……それは」

「そう、愛の力!! 私と刹那の愛の力!!」

「なんで二回言ったのか分からないけど……愛の力って一方的だよな? 兄さん気づいて無いし……」

「その内氣づいてくれます!！」

「こんな妹を見てるとどうしても刹那とくっ付けたくなるね。そして僕は桜さんと……」

「姉さんがどうかした? 総一郎」

「いや、なんでもないよ。おや? 動き出したよ。」

「そりゃそうでしょう。もうHRが終了しましたから。」

さて、刹那は

「……すまない、鈴波さん居るか?」

「へ、石田君? 絆ちゃんに用なの? ちょっと待っててね。絆ちゃん! 石田君が呼んでるよ!」

ガタッ

ダッダッダッダッ

「き、来てくれたんだ。早いね。」

「……お前が呼んだんだろ？」

「此所じゃなんだし……ちょっとこっちについてきて」

「……」

手を取られ連れて行かれる

何処に向かつてるんだ？

「此所で良いかな？」

連れて来られたのは校舎裏

やはり

「……決闘か？」

「なにか言った？」

「いや、なんでもない。……それで俺になんのようだ？」

やっぱり聞かなくちゃな

「／／／き、気づいて無いの！？」

「何が？」

「／／／普通女の子から手紙貰ったらちょっとは期待して欲しいんだけどな」

良く分かんが

「……噛まないな」

「／／／あ、あの時はちょっと緊張しただけだひょー！ーうゝ、また噛んだ……」

「……落ち着いたらどうだ。」

何か慌ただしいし

「ふう、よし！！落ち着いた。い、行くよ。刹那君」

「……ああ、覚悟は決めた」

殴られる覚悟を……

「／／／／へ？まだ何も……い、良いやこのまま。」

「／／／／せ、刹那君！！私と……付き合ってください！！」

へ、付き合っ？

「……何処にだ？」

アニメイ 辺りなら喜んで付き合っんだが……

「／／／／違います！！私は貴方が好きなんです。お付き合いしてください。」

「…………え？」

お付き合いってあれ？

あの最終的には男女の営みをするかもしれない、あのお付き合い

いや、まてまて俺

こんな無口でオタクでシャイな俺にこんな可愛い娘が付き合ってく  
れなんて言うわけ無いじゃないか

「／／／あの…………ダメですか？」

上目遣い＋涙目＝最強コンボ

グハア！！

やられたぜ

だけど…………

「……悪いなその今はお前のことを余り知らないから」

「そうですが……ごめんなさい。やっぱりいきなりは迷惑でしたよね。」

だから……

「……友達」

「へ？」

「友達から……始めないか絆？」

「ハ、ハイ!!」

こうして、とりあえず落ち着く刹那でした。

すると

「じゃあ僕も友達だね鈴波さん」

「キヤア！？ほ、保志君」

「……何処から沸いた総一郎？」

「嫌だなあ、人をゴキブリ見たいに。」

「総一兄さん勝手に行かないでよ。それと、鈴波さん？」

「はい。」

「貴女には負けないから！」

この一言は絆にも通じたのか

「私も負けません！！」

「兄さんはモテるね。」

「彰……俺ってモテるか？」

「今日までで100%二人はおちてる。」

二人？

絆と……誰だ？

「はあ、とりあえず鈴波さんが一歩リードかな？」

他のメンバーにも認めて貰えた絆だった。

今日の刹那争奪戦

絆が一歩リード

その後 自宅にて（前書き）

何処に行きたいんだろ？

俺は……

## その後 自宅にて

「ただいま」

「……ただいま」

「「お邪魔します。」」

「こんにちは、お邪魔します。」

あの後、絆を入れた五人で家に帰った。

「お帰り。そしていらっしやい。総一郎君に、椿ちゃんそれと……お名前教えてくれる？」

「初めまして、鈴波絆って言います。」

「絆ちゃんかあ。よろしくね。」

「部屋行こー!!」

彰がそう言って皆を自分の部屋に連れて行く。

俺の部屋？

いろんな物があるから遊べないんだよね……

俺が過ごす分には楽なんだけど

「……ちよつと部屋に戻る」

「分かったよ。」

そう彰に伝えて俺は一旦部屋に戻る事にした。

「彰君、刹那君は？」

「ん？部屋に一旦戻ったよ。多分荷物置いて着替えたら来るんじゃないかな？」

「なら良いけど……」

鈴波さん

本当に兄さんのことが好きみたいだな。

ああ、でも僕はどっちを応援したら良いんだ？

椿のことを応援したい気持ちもある。幼なじみだし……いろいろ世話になってるから

でも鈴波さんのことを応援したい気持ちもある。

まだ短い付き合いだけど兄さんのことを本気で好きになってくれた人だ

僕は一体どうしたら……

「お悩み事かい彰？」

「総一郎か……いや、どっちを応援したら良いんだろって思ってた……」

「なるほど」

僕と総一郎は椿と鈴波さんの方に目を向けると仲良く話している姿が見える。

「まあでも僕は妹を応援するけどね……好きになってもらおうと努

力する姿を身近で見てきたから……」

総一郎……

なら僕は

「総一郎が椿を応援するなら、僕は鈴波さんを応援するよ。」

「どうして？」

だって

「フェアじゃ無いじゃないか。二人も椿に着いたら……それに……」

「それに？」

「知っていききたいんだ。兄さんを好きになった人のことを」

「フーン、まあ僕たちは見守って行くぐらいしか今出来る事は無いんだけどね。」

「ハハハ。」

さて、

「皆でゲームでもしようか？」

今は

「「「うん／はい／良いよ」「」

遊ぼうか

着替え終わって彰の部屋に行くと皆でゲームしていた。

早いな、行動が……

「……ガンムか？」

女の子もいるのに……

いや、椿は小さい頃からずっと一緒だったから、違和感無いんだけど……絆、大丈夫なのか

「私はガン ム結構好きだよ。キラ君カッコいいよね。」

「ありがとう」

「……なぜ総一郎がお礼を言う？」

「いや、言わないといけない気がして」

「……」

変な奴だ

「あ、でも一番カッコいいのは現実でも二次元でも刹那君かな。」

「……ありがとう」

それから夕方まで対戦していた。

今日のゲーム順位

一位 絆 意外にゲーマーだった。

二位 総一郎 ストフリのドラグーン射出の位置が上手すぎる

三位 刹那 俺が……ガンダムだ!!

四位 彰 力はただ力なんて言ってるから負けるんだよ？

五位 椿 頑張ってたよ？

## 刹那の日記

### 刹那の日記

今日の昼間いきなり絆に手紙をもらった。

内容を読んで俺は最初果たし状だと思っていたが椿や総一郎達がこれはラブレターだと言ってきたがあり得ないと思ったため、流した

呼び出された場所に行き教室の娘に絆を呼んでもらった。

その後校舎裏に連れていかれ告白された

.....

俺はどうしたら良いんだろう

確かに絆は、今日話した限りではとても好感の持てる女の子だ。

多分モテるのだろう

いろんな人から

椿とは異なる女子だ。

……こうやって考えてみると女子の友達って絆と椿だけだな……

雪乃は……あいつがどう思ってくれてるかによるからな

何時かちゃんと告白の返事をしなくちゃいけないんだろっ……

ちゃんと……考えないと

「……ふう。」

今日はこんなもんか

アッ、もうこんな時間か……

テレビテレビ



## 夜の買い物

「……………彰」

「いくら兄さんでもこれは譲れない」

「……………それをこっちに寄越せ。」

「嫌だ!!」

彰と刹那がにらみ合いをしている。

それを見ていた二人の姉妹は

「仲良いね。」

「そうだねお姉ちゃん。」

二人を見ながら会話をしていた。

「たかがプリンなのに……………」

「そうだね凜」

その間にも二人は

「……プリンは俺のだ。」

「僕の!!」

「……やるのか？」

「やる」

二人はにらみ合いながら……

「じゃんけん!!」

「……ポイ」

刹那　グー

彰　　パー

結果

彰  
WIN

「クッ……………負けたか」

「今回は僕の勝ちだね。じゃあプリンは頂くね」

悔しい気持ちを丸出しの刹那

ふと立ち上がる。

「何処に行くの刹那？」

「……………姉さんか……………ちょっとコンビニにな」

「……………最初からコンビニに行けばいいのに」

s i d e 刹那

まったく彰にじゃんけんで負けるとは思わなかったな

クソッ

この寒いなかプリンを買うためにコンビニに向かう俺ってどうなんだ？

まあ良いんだけどさ

自分が食べたいんだし……

あとビーフジャーキー買ってこ

ようやくコンビニについた  
ウィーン

「いらっしゃいませ」ご主人様

「……………」

ウィーン

あれ、ここコンビニだよな？

俺が間違えた訳じゃ無いよな。

も、もう一度

ウィーン

「お帰りなさいませ」ご主人様

ウィーン

あれ？

やっぱりメイドがいる。

しかも知ってる奴だし……

あとセリフが変わってたよな

他人のそら似でありますように

三度目の挑戦だ。

ウィーン

「いらっしやいませご主人様。私の事を好きにして構いませんよ？」

「……何をやっている……石原」

「嫌ですねえご主人様。何時も見たいにお蘭って呼んでくださいよ」

「…………お蘭」

「ハイ」

こいつの名前は石原 蘭

通称 お蘭

だ。

まあ見ての通りコスプレが好きな奴だが……

とりあえず

「……バイト先間違えてないか？」

突っ込むことにした

夜の買い物（後書き）

続く！！

## コンビニエ

前回のあらすじ

彰と最後のプリンを巡って争った刹那

しかし刹那はその勝負に負けてしまった。

そして自分の分のプリンをコンビニに買いに行ったらなんとメイドが現れた。

さらにそのメイドは同じ学校の子生徒の石原 蘭だった。

「で、どうこのメイド服？似合ってる？」

「……………まあ似合ってると思うぞ。」

「良かった。ご主人様にそうやって言ってもらえて。」

そう言って喜ぶ蘭

なんで俺がご主人様なんだ？

「お蘭：お前……客に対してすべてご主人様なんて言っているのか？」

ダメだぞ勘違いする変な男が最近多いんだから

「この格好で迎えることはするけどご主人様なんて言っていないよ。君にだけ。」

なんで俺だけ？

まあ良い

だがなぜ

「……コンビニにメイドなんだ？」

「店長に頼んだら良いつて言ったから。」

「なぜ店長に頼んだ？」

「メイド服を着たかったから。」

「……ならメイド喫茶でバイトしろよ」

そう言つと指をふつて

「チ・チ・チ、分かつてないな刹那君は……メイド喫茶にメイドがいる。これは当たり前」

まあメイド喫茶だからな

「だけどコンビニにメイドがいる!!これは斬新な考えじゃない?」

「……奇抜ではあるな。」

「でしょでしょ」

「……だが、」

「ん?」

「……コンビニでメイド服を着てのバイトは危険だぞ。」

気を付けろよ

「／／／／……」

「……どうした?顔が赤いぞ?」

「／／／／やっぱり刹那君は女たらしだ。」

「?まあ良いが。さて、じゃあ会計頼む。」

そう言っつてプリンとビーフジャーキーを買う

「ハイ、プリンが一つ、ビーフジャーキーが一つ、それにメイドの心が一つで、五百二十五円です。」

メイドの心!?

俺が何時そんなもの買った?

「……お蘭」

「冗談だよゝ金額は変わらないけどね。」

ジャストのお金を渡し精算を終わらせる。

「ここでバイトしていることは皆に内緒ね。」

「……なぜ?」

「メイド服……刹那君以外に見せたく無くなっちゃったから」

「分かった。じゃあな」

「いってらっしゃいませ」主人様

そう言って店を出ていく。

今晚の満足度

お蘭 メイド服見られて恥ずかしかったな

彰 プリン〜プリン〜

刹那 良いものを見た

学校でデュエル！（前書き）

今回は遊戯王を知らない人にはちょっと分かりにくいかも……カー  
ド効果とか……

さらにこの一話じゃ終わらなかったよ

学校でデュエル！

休憩の時間

「刹那！！」

「……なんだ総一郎？」

人が絆に勧められた本を読んでいるのに……

「デュエルだ！！」

「……プラスール読んでいるから後でな」

「酷い！！」

「ねえ彰……」

「どうしたの椿？」

「最近私影薄くない？」

「………気のせいだよ」

「なによその間!!」

煩いな

次の休憩

「今度こそデュエルだ!!」

「……しょうがないな。ならデッキを選べ」

いくつかあるからな。

「無論、魔法使いだ。」

「……」

ヤベ!

魔法使いのデッキ今一回崩して、憑依装着のデッキになってるんだ  
よな……

まあ、良いか。

「……良いだろう。行くぞ!」

「刹那頑張れ」。

「兄さん頑張つてね。」

「僕の応援がないよ!」?

「刹那君頑張つてね。あ、後保志君も」

「鈴波さんいつの間に……しかもついでのように応援されたし……」

まあ、ドンマイ総一郎

さて、シャッフルし終えたな。

じゃあ

「デュエル!!」

「先攻は貰うよ。僕のターン」

デッキに手を置いて

「ドロー!!僕はモンスターをセット、さらに手札から永続魔法、世界樹を発動してカードを一枚セット、ターンエンド」

「……俺のターン。ドロー」

なかなかだな。

世界樹はたったことは植物デッキか……

だが…圧倒させて貰う!!

「…俺は魔法カード、一族の結束を発動。」

「墓地にモンスターが居ないのに？」

なめるなよ。

「さらに水霊使いエリアを攻撃表示で召喚。そして速効魔法、デイメンションマジックを発動。場のエリアをリリースして手札から憑依装着エリアを特殊召喚。」

「え！？じゃあ」

予想は着いたか

「デイメンションマジックのもう一つの効果でセットモンスターを破壊。」

「チエ。」

破壊したモンスターはプチトマボーか……

アブねえ……

「……憑依装着エリアの攻撃力は今2650だ。」

墓地にモンスター行ったし

「……バトル！……憑依装着エリアでダイレクトアタック！」

「通すしか無いよ。」

総一郎 LP 5350

刹那 LP 8000

「俺はカードを二枚セットしてターンエンド。」

手札が0か……

まあ調整中のデッキだから仕方ないか……

「僕のターン。ドロー僕はグローアップバルブを攻撃表示で召喚。さらにリバースカードオープン。魔法カード超栄養太陽を発動。場のグローアップバルブをリリースしてデッキからローンファイアブロッサムを特殊召喚。さらに、ローンファイアブロッサムの効果発動。場の植物族モンスターを一体リリースしてデッキから植物族モンスターを特殊召喚する。僕はローンファイア自身をリリースし、デッキからギガプラントを特殊召喚。」

うわあ、来たよギガプラント

手札にスーペルヴィス有るのかな？

「手札から装備魔法、スーペルヴィスをギガプラントに装備し、再度召喚した状態にする。」

「上級モンスターでも出すのか？」

「うん。ギガプラントの効果発動。手札または墓地から1ターンに一度植物族モンスターを一体特殊召喚する。僕は墓地からローンファイアブロッサムを蘇生。さらにローンファイアブロッサムの効果発動。ローンファイアブロッサムをリリースし、デッキから椿姫ティタニアルを特殊召喚する。」

椿姫ティタニアル

攻撃力 2800

エリア負けちゃってるよ……

勝てるかな……俺

学校でデュエル！（後書き）

次回も遊戯王です。

この続き

デュエル！！

「椿姫ティタニアルでエリアに攻撃」

「……通すしかない」

「ならギガプラントでダイレクトアタック。」

|     |    |      |
|-----|----|------|
| 刹那  | LP | 5450 |
| 総一郎 | LP | 5350 |

まだ僅かに俺が勝っている

「僕はターンエンド」

伏せカードは無しか

「俺のターン。ドロー、モンスターをセット。ターンエンド」

「僕のターン。ドロー、ギガプラントの効果発動。墓地に存在するローンファイアを蘇生。そして手札からダンディライオンを通常召喚。そしてローンファイアの効果でダンディライオンをリリースしてデッキからスプーアを特殊召喚。そして墓地に送られたダンディライオンの効果でフィールドに2体の綿毛トークンを特殊召喚するが……フィールドに一つしか空気が無いから一体だけだよ。そしてレベル1綿毛トークンにレベル1スプーアをチューニング」

うわあ、最近強いシンクロ増えすぎじゃね？

「シンクロチューナー、フォーミュラシンクロンを召喚。効果で一枚ドローする。さらにレベル3ローンファイアにレベル2フォーミュラシンクロンをチューニング」

まだ出るの？

「AO」カタストルを召喚。行くよ。バトル、まずカタストルでセツトモンスターに攻撃」

だが……甘い

「……リバーズカードオープン。トラップ発動。聖なるバリア・ミラーフォース」

総一郎のモンスターを全て破壊。対象はとって無いからティタニア

ルでも無効に出来ないしね。

「えゝ？何でさっき使わないんだよ。」

だって絶対に何らかの方法でギガプラント蘇生して来るじゃん。

「……展開してからのほうが使った時に効果が良いからな。」

対象が多くなるから

「一枚セットしてターンエンド」

「俺のターン。ドロー」

引いたカードを見て

「……悪いな総一郎今回は俺の勝ちだ。」

「え？」

「憑依装着ウインを反転召喚する。」

攻撃力 2650

「さらに手札から憑依装着ヒータを召喚。」

攻撃力 2650

「それだけじゃあ攻撃力足りないよ？」

大丈夫だ。

「バトル。ウインでダイレクトアタックとトラップ発動マジシャンズサークル。お互いにデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族を攻撃表示で特殊召喚する。俺は憑依装着エリアを特殊召喚する。」

総一郎のデッキには魔法使い族は入っていないため、特殊召喚出来ない。

「じゃあ、終わりだ。三体でダイレクトアタック。」

「……………負けた」

デュエルが終わったあと

「帰ったらもう一度やる!!」

別に良いが……

さっきのデュエル……

「……お前プレイングミスしてたぞ。」

「え？何処が？」

「……スーペルヴィスのもう一つの効果。使い忘れただろ。」

このカードが墓地に送られた時、墓地に存在する通常モンスターを  
一体特殊召喚するって効果

「あっ!!そういえば……」

「あれで、ギガプラント蘇生させていればまだ死ななかつたはずだから……」

そう言つて俺はプラナス　ールを再び読み始めた。

絆可愛い

こっちの絆も可愛いけどな……

ひとっ！！（前書き）

明けましておめでとっ！あります。

今年初めての更新です

短いです。

そしてキャラが出てくる人数が少ないです。

ひとつ！

「…………刹那君。実はお願いがあるんだけど…………」

「…………どうした絆？」

授業後教室にたまたま残っていたら絆に声をかけられた。

「実は…………生徒会に入って欲しいんだ。」

「……………」

生徒会ってあれか？あの学校のためにとか、より良い学校にするためには皆さんの協力が必要ですよとか言うやつが入るやつなのか？

「…………ダメですか？」

「…………ッ！！」

そんな捨てられた子犬みたいな目で俺を見るな！！

とりあえず理由を……

「……何故だ？」

「あの今回の役員選挙の締め切りがもうすぐなのにまだ誰一人として候補者が居ないんです……なので今頼りになる人に声をかけてお願いをしている所で……」

そこで俺に声をかけたのか……

「……他にどんなやつに声をかけたんだ？」

「とりあえず見つけた順に彰君、保志君、椿ちゃんと刹那君。そして三人とも立候補してくれることになったよ。」

何時ものメンバーか……

「……お前は立候補するのか？」

「勿論！！人に薦めといて自分がしないなんてあり得ないよ！！」

そっか……まあ立ち会い演説は嫌なんだが……

「……良いだろう」

絆にお願いされたらな……

これもミッションだと思えば良い経験だしな

「ホント！？ありがとう刹那君。じゃあ生徒会長に立候補よろしくね。あと全校演説明日だから。あ、でもこれ以上立候補が無かったら演説無いからね。それじゃ！」

えッ！？生徒会長？

「……待て絆、何で俺が会長なんだ？」

「だって……保志君は副会長だし彰君は会計で椿ちゃんと私が書記……あと余ってるのは会長枠だけなんだもん。」

役職だけでも変えてくれないかな？

「それじゃ、また明日」

そう言って走って帰っていく絆……

どうしようかな？俺……

会長なんかできる気がしないや？

本日の立候補者

会計二名 保志 椿

鈴波 絆

書記一名 石田 彰

副会長一名 保志 総一郎

会長一名

石田

刹那

生徒会？（前書き）

どうも……最近コードギアスにはまっている緋翠です。

ルルカツコいいー！

はい、では本編をどうぞ

生徒会？

「……なあ、彰」

「なに？兄さん」

家に帰ってから彰に声をかけた

「生徒会ってなにをするんだ？」

「えッと……学校の秩序を守るとか……」

「それは風紀の仕事だろ。」

「じゃ、じゃあ学校を綺麗にするとか……」

「……美化の仕事だ」

「け、怪我人を保けん」「保健委員がある」………」

「しゅ、修学旅行の行き先を決める」

「生徒が決めて良いはず無いだろう。」

「…………僕にも分かんないよ?」

「…………そうか」

彰にも分かんないか……

どうしたもんか……

コンコン

ノックの音が聞こえた

「良いよ入って」

彰がそういうと

ドアを開けて姉さんが入ってくる。

「ご飯だよ。リビングでもうみんな待ってるから」

「分かったよ姉さん」

「刹那は？」

「……………分かった」

そう言って姉さんは下に降りていく

「兄さん兄さん。」

「……………なんだ？」

「姉さんなら生徒会の仕事や活動のこと分かるんじゃない？」

「……………かもな」

ご飯の後にでも聞いてみるか…………

夕食後

俺は姉さんの部屋の前にいた

「……………」

どうやって話を切り出そうか……

入って急に

姉さん生徒会ってなにをするの？

って聞いたら絶対に

刹那！？あなた生徒会がなにをしている所のことも知らないの？

子供ね〜

なんてバカにされるに決まっている（刹那は姉に可愛がってもらっていることに残念ながら気づいていません。）

でもだからと言って生徒会の仕事を知らなくていきなり入るのもな

……

絆がサポートしてくれるだろうが……忙しくなることもありそうだし

そんな感じで桜の部屋の前で色々考えていると

「どうしたの刹那？お姉ちゃんの部屋の前で？」

廊下から桜が歩いてきた

「……別に何でもない」

いや！！聞けよ俺！！

「悩み事？」

「ッ！！」

「……学校？」

「　　ッ！！」

「……生徒会？」

「……何故分かる？」

「お姉ちゃんだもん。弟の悩みなんてすぐに分かるよ。」

胸を張りながら答える

「で、生徒会の何が知りたいの？」

「……何をすれば良い？」

生徒会ってどんな仕事があるんだ？

「生徒会はね、学校でやる体育祭、文化祭などのイベントや他校との交流、他には全校生徒の代表になって皆を引っ張って行く集団かな？」

そんな大事な仕事をやるのか

「……………そう……ありがとう姉さん」

俺に出来ないような気しかないな

やっぱり断るか……

「会長になるんでしょう？」

「ッ！？何で知っている！？」

彰以外誰も家族は知らないはずだ！！

「彰がそう言ってたよ」

よし！！彰、後にも私刑決定！！

うわぁ姉さんに知られたって事はもしも今やっぱり止めるって言ったら

やっぱりダメだね刹那。何でアナタが私の弟なんだろうね？

って言われる？

どうしよう？

「頑張ってね刹那」

「え？」

「お姉ちゃん応援してるよ。だから……鈴波さんや椿ちゃん、彰に  
総一郎と一緒に頑張って」

「……………ああ」

やっぱりダメだ……………この笑顔に今さら止めるなんて言えないよ……………

「おやすみ」

そうして部屋に戻った姉さん

俺は……

「……やるしかないか」

絆とも約束したしな

その後

彰の部屋

「待つて!! 兄さん僕なにかした?」

「……………」

「いや質問に答えてよ！？兄さん」

「……………」

「その手にあるのってまさか……………ちよっ！…！」

その後……………彰の部屋からいくつかの発砲音が聞こえた

## 活動

「祭りをしよう!！」

「「「」」」……ハイ?」「」「」

どうもこんにちは

無事に会長に当選した刹那です。

なにか総一郎がいきなり変な事を言い出しました。

「……総一郎、いきなり何を言っている?」

「だから祭りだよ。分かる? 英語で言えば f e s t i v a l」

「何で英語?」

「理解しなくても良いのよ彰」

「クツ……椿が冷たい……だが!! 僕は祭りがしたい!!」

椿に冷たくされながらも自分の意見を曲げない総一郎

「でも祭りってどんな？」

絆が総一郎以外の皆の心の声をぶつけた

「フ……それは…」

「『『『ゴクッ』『』『』」

息を呑む音が聞こえるほど静かになる。

「コスプレ祭りだー!!」

何処かの小学生名探偵のように指を指しながら宣言する

「……コスプレ」

「祭り……」

「ってなんですか？」

「……………」

全員が総一郎に説明を求める

「簡単さ。ただ皆でコスプレをしてパーティーをするんだ。勿論催し物も開催するけどね!!」

「……………その催し物とはなんだ？」

「生徒会メンバー全員で……………ナンパをするんだ!!」

「「「「はっ?」「」「」

ナンパ?

「このっ、バカ兄さん!!そんな事出来るわけ無いでしょう!!」

そうだそうだ!!

もっと言ってやれ椿!!

俺みたいなシャイ野郎が実際の女の子に声をかけられる訳が無いだろうが!!

「もしも刹那がナンパに成功したら!?!いや……………刹那なら必ず成功

するんですよ！！そうになったらどうするんですか総一兄さん！！」

いや、ナンパは成功しないだろ

……自分で言っけて悲しくなるよ……

「どうしたの兄さん？そんな隅っこで黄昏て？」

「彰……少しな……」

彰が心配して声をかけてくれた……

済まないな

この前お前の部屋でエアガンを584発も撃ってしまって……

掃除が大変だっただろ？

「ともかく！！この祭りは中止です。やりません」

「そうです。そうです。」

まだ諦めないのか総一郎……

よく椿と絆相手にあんな粘れるな……

「クツ……確かに刹那がナンパに成功する確率は100%だと言つて良いよ。だが君たち二人はデメリットしか見ていない」

「デメリット？ならなにかメリットがあるんですか？」

「保志君、それだけ言っただから私たち二人が納得する理由があるの？」

「フ……当然だ。ちょっと耳を貸してくれ」

三人で内緒話を始める

「何を話してるんだろうね。兄さん」

「そうだな」

「一体なんなんだ？」

s i d e 総一郎

顔を近づけて話をする僕たち

「で、総一兄さん……メリットって？」

「まあ少し落ち着きなよ my sister」

「何故に英語で話すの？」

「絆ちゃん……気にしちゃダメよ」

「良いか？この祭りはコスプレをしながらやる祭りだ。」

「「フンフン」「」

「つまり一日中コスプレをしていなくてはいけない。そして……」

「「…そして？」」

二人がさらに顔を近づける

「最近の刹那はコードギアスにはまっているらしい」

その言葉にピンツと来たのか椿が

「ッ！ーまさか！ー」

「そう……一日中刹那はゼロのコスプレをするはず。つまり普段は制服で見えない刹那の体のラインがはっきり見えるんだ！ー」

「ええっ！ー」

絆ちゃんと椿は理解したのか

「……しょ、しょうがないわね。一日中コスプレをしていなくてはいけない祭りだもんね」

「そ、そうだね。ふと体のラインに目がいつても仕方ないよね。あ、カメラマンさんも呼ばなきゃ。」

フッ……墜ちたか……

s i d e e n d

ようやく内緒話が終わったのか三人がこっちにやって来る

「……中止か？」

「中止でしょう。当たり前のことだよね？」

彰と聞いてみると

「何を言ってるの二人とも？」

「「へ？」」

「やりますよ……コスプレ祭り」

「なっ！？」

「一体あの内緒話はどんな内容だったんだ？」

「フッフ……刹那のゼロ刹那のゼロ刹那のゼロ……」

「刹那君の体のライン………／／／ハウアツ！！」

「本当に何が合ったんだ！？」

「禁則事項だよ刹那」

「総一郎がいい笑顔を向けて言ってきた」

今日の活動

コスプレ祭りの企画

## 活動（後書き）

次回……全く今回の話と繋がりはないけどとあるパーティーゲームをします。

## ゲーム

ここは……とある部屋

いまここに五人の男女がいる

「……刹那」

「……どうした総一郎？」

「何処なんだここは？」

「……気づかないのか？」

「ここは生徒会室ですよ」

刹那の代わりに絆が総一郎の問いに答えた

「嘘だ！！だって生徒会室ってこんなに暗く無かったじゃないか！  
！」

「って言うか、何時もと始まりかたからして違うよね」

「ダメよ彰。そういう所にツッコミを入れちゃ。」

彰と椿が会話をする中

「……………とりあえず、今日やることを発表する。」

刹那がそう切り出すと

「とりあえず無理矢理にでも話を進める気なんだね。」

「兄さんもうちょっと僕たちに絡んでくれても……………」

「確かに、無理やり感がちよつとあるわね。。」

「大丈夫だよ刹那君。私がフォローするから」

皆それぞれ言いたい事を言う

だが刹那は

「……………今日の予定は」

「「まさかの無視!!」」

「さすが……刹那君」

三人をスルーして今日のやることを発表した

「……今日やるのは……」

一旦そこで言葉を区切り

言葉を紡ぐ

「……」王様ゲームだ」

「「「王様ゲーム!」?」」」

説明しよう王様ゲームとは

まず用意するもの

割りばしなどをたくさん長いもの

ペンの2つ

ルール

まず割りばしに一本だけ“王”の文字を書き残りの割りばしにやる人数-1の本数分数字を一から書く

そして誰か一人が数字や王の文字を書かれた方を手で隠しながら割りばしを引く

そこで王の書かれた割りばしを引いたものが王様として他の人たちに数字で命令ができる。なお、この命令は無理なものでなければしななければならない。  
以上がルールだ

「……さて、やるか。あ、ちなみにこれは本編の番外編なんでここでキスをしたとしてもノーカウントだからな。」

「「ガン!!」」

若干二名が落ち込んでいるがまあ良いだろう。

では、スタート!!

「「「「王様だあれだ!?!」」」」

皆が手に取った割りばしを見る

「私ね」

椿が王様だった

「王様の命令は絶対……何にしようかしら?」

最近あまり見ない物凄い良い笑顔で考える

(うーん数字で命令しなくちゃいけないからなあ。刹那に抱き締めてもらおう……なんて命令は出来ないし、まあ最初だから軽いので良いかしら)

「三番はこれからゲームの間私の事をマスターって呼ぶこと」

「ハハ、僕じゃ無いから良いや彰は？」

「僕も違つよ。鈴波さんは？」

「私も違つよ」

「」「」「だつたら」「」「」

四人が一斉に刹那を見る

「…………俺だ」

「じゃあこれから刹那は私の事をマスターって呼ぶこと！！良いわね。」

「…………了解マスター」

「ッ！！（い、威力高過ぎ！！）／／／／」

「それじゃあ次に行こうか」

総一郎がそう言って二回目の準備を始める。

「せいのー!」

「「「「王様であーれだ!」」「」「」」

「フツ…………俺だ。」

「刹那か」

「兄さんか」

「刹那君なら。」

「早く言いなさいよ。」

ウツ…………四人ともうちよつと盛り上がるつよ…………

まあ良いけどさ。

どうしようかな?このメンバーだったら何を頼んでもそれなりに面白そうなんだが……

「……二番は俺に対しての（まあ、シャイとか無口に関しての）気持ちは言え！！」

そう言つと一瞬時が止まったかのように皆動きが止まる

そして

「二番は僕だよ刹那」

総一郎が動き出した

「何で！？何で二番なの刹那君！！一番のが良いと思つな私」

「そうよ刹那！！三番が一番良い数字だと私は考えるわ！！」

「二人とも自己アピールしすぎじゃない？」

若干二人の恋する乙女が暴走しているが気にせず

「……じゃあ総一郎お前の気持ちを教えてくれ。」

「うーん、そうだな。親友以上恋人未満？」

「「「当たり前だ／です／だわ!!」」」

ウォッ!? どうしたんだ三人は

「まず恋人って選択肢が入っている時点でおかしいよ保志君!!」

「そうですよ総一兄さん!! 貴方と刹那が恋人になんか絶対になりません!!」

「椿、絆ちゃん……そんなこと分かんないだろ?……今の世の中Bしだって一部の男子に受けているんだから!!」

「兄さんと総一郎か……やるなら兄さんが受けだな。」

「彰!? 貴方まで何を考えてるの!?!」

椿が彰に詰め寄る

「いや……だって……総一郎の言うことも一理あるし……兄さん

が否定してないし。」

そこまで言われて気づいたのか絆と椿が刹那を見る……

「……俺は嫌だぞ。別にBLを否定する気は無いけどな」

それも一種の愛の形だしな

巻き込まれるのは嫌だけどね。

「まあ、真面目に命令に答えるかな。」

「「ふざけてたの!?!」」

椿と絆が二人でツツコミを入れる

「当たり前だよ。いくら僕でも流石にそこまではまだ……」

「兄さんが否定した時点で気づいたよ僕は」

「「うう……」」

二人が肩を落としているが構わず総一郎は話を進める

「“今のまま”で良いんじゃない？」

今のまま、か……

「ありがとう総一郎。」

「親友の頼みとあらば……」

「さ、三回目、」

「行くわよー!」

椿と絆が今までのを無かったことのように振る舞い三回目にいこうとするが……

「……………今回はここまでだ」

「「そんなぁ!?!」」

「ではまた」

顧問？

前々回の続き

「じゃあまず誰が何のコスプレをするか決めようか」  
総一郎が話を進める

「……その前にやる日を決めないとダメだろ。」

全く……慌てんぼうだな総一郎は

「やる日なら決まってるよ。来月の第三木曜日だからね。」

「……平日だよな……そんな行事ができるのか？」

「そつだよ総一郎。兄さんの言う通りその日は平日だよ。」

「でも彰……確かその日は何かの行事があつたような気がするのよね。」

椿が僕たち二人に教えてくれる。

「……何かあったか？」

「ああ、確かその日は学校をあげての誕生日会だったよ。」

絆が答えてくれた

……誰の誕生日会？

「そうだったわね。確か理事長の誕生日会の日だね。」

この学校理事長いたの？

「刹那……どの学校にも理事長はいるわよ。」

……俺今声に出してたか？

「相変わらず椿って兄さんのことよくわかるよね。」

「私だってそのうち……」

なんか二人が悔しがっているんだが……何故だろう？

「刹那は気にしなくても良いんじゃない？」

「じゃあ総一郎にはアイツらがなぜ落ち込んでいるか分かるんだな。」

凄いなあ

素直に尊敬するよ。

「周りをよく見れば余程鈍感じゃなければ分かるよ?」

「……で、結論は?」

「だからその日に全校生徒でコスプレをして皆でダンスしたりするんだ。あ、ちなみにダンスのパートナーは当日に誰でも良いから声をかけて見つけること。」

なるほど……

それが

「……ナンパか」

「そういつこと」

そんな会話をしていると生徒会室のドアが開いた

「ヤッホー諸君！！問題起こして無いかな？」

生徒会顧問の佐倉 紫先生だった

「いきなりの第一声がそれですか……」

椿がゲンナリしながら紫先生にそう言う。

「良いじゃない。初登場でテンション上がってんのよ。」

「佐倉先生？あまりそう言う発言は……」

「気にするな石田（弟）」

凄い呼び名だな。

「で、なんの話をしてたんだ？」

「実は……」

## パートナー

紫先生に今までの経緯を話すと

「エゝめんどくさいよ。」

ズルッ

皆こけた

「普通先生って生徒の意見を尊重するものじゃ無いんですか？」

総一郎がツツコミを入れた

「そんなの私の勝手でしょ保志（兄）」

あ、やっぱりそんな呼び方なんだ

「第一……ナンパなんか認めたら刹那が大変だろう？」

紫先生がそう言いながらこっちを見る

「……………そうですね」

ナンパなんか俺は出来ないからな

「モテまくって大変になるのが目に見えてる。」

待て……………今とてつもなく無視出来ない一言が聞こえたような……………

「あゝ、やっぱり先生もそう思います?」

イヤ、だから総一郎……………俺はモテないって……………

「それで生徒が暴動起こして怪我をすると私が責任取らされるから却下だ。」

「それじゃ先生。兄さんがモテなくて暴動が起きなければとっても良いつてことですか?」

「うーん、まあそれなら」

彰が交渉した結果一応出来ることになったが……

「……………俺はモテないだろ?」

「刹那はもうそろそろ自分のスペックを学習すべきだと思うよ。」

「保志君の言う通りだよ刹那君。」

「確かに兄さんはもう少し自分のことを理解したほうが良いよ。」

「本当ね。」

ウッ?

何故だろう

皆が冷たい……

「……で、どうするんだ？」

「そりゃナンパがダメなら当日じゃなくて事前にパートナーを決めておけば良いんじゃない？」

え？

「そ、それにしましょう刹那君！！私！！空いてますよ！！！」

「な！ズルいわよ絆！！私だって空いてるわよ刹那！！！」

二人がなんか急にテンション高くなったな

何故だ？

「ちなみに私も空いてるぞ。」

「「紫先生！？」「」

先生……

ん  
じ  
ゃ  
あ

「…………紫先生お願いします」

「……冗談のつもりだったんだが？悪い気はせんな。年上のお姉さんに任せときなさい。」

こうして俺のパートナーは決まったんだが……

「刹那君は年上が好み刹那君は年上が好み刹那君は年上が好み刹那君は年上が好み刹那君は年上が好み刹那君は年上が好み刹那君は年上が好み」

絆がこわれたり

「そんな……刹那の考えてる事が分かんないだなんて……あり得ないあり得ないあり得ないあり得ないありえないありえないありえないありえないアリエナイアリエナイアリエナイ！」

椿まで壊れてしまった……

先生は先生で

「刹那のパートナーか……フッフッフ／＼／＼当日が楽しみだ。」

「何このカオス……」

「さあ？ただ原因が兄さんだってことは分かるよ。ネツ総一郎。」

「ああ」

俺のせいなのか？

## 当日

まあそんな事があつて誕生日当日……

理事長の誕生日パーティーのために今日まで頑張った生徒会メンバー

そんなメンバー達は今学校のエントランスホールに皆それぞれコスプレをしながら待っている。

「にしても総一郎のコスプレは似合ってるね。キラ・ヤマト?」

「ありがと彰……君だってアスランのコスプレ似合ってるよ」

総一郎と彰がお互いを誉めあっている

……お前ら二人はスペック高くて良いな……

羨ましいよ。

軍服着るだけでコスプレになるなんて!!

「椿ちゃん可愛いね。何のコスプレ？」

「FF7のティファだけど……胸の辺りが……」

胸を触りながら落ち込む椿

「だ、大丈夫だよ椿ちゃん似合ってるから!!」

「ありがとう……そう言う絆は何のコスプレなの？」

「私？私はね、プラスガールに出てくる絆ちゃんのコスプレだよ。似合う？」

そんな普通の会話が二人ではなされていた

さて、俺も仮面を被ろうか

ボイスチェンジャーのスイッチをいれゼロの仮面を被る

撃って良いのは撃たれる覚悟のある奴だけだ！！

……………  
すいません？

この格好になったらやりたかった事なんです。

「似合ってるね刹那」

「……………そうか？」

総一郎がいの一番に誉めてくれた

でも男にほめられるよりも女子にほめられたかったよ。

俺は……

さて

後は紫先生を待つばかりなんだが……

遅いな

side 紫

ヤバいッ!!

約束の時間に間に合わない

せっかく刹那とのダンスパーティーだと言っのに……

これもみんな他の女教師のせいだ!!

みんなして私に“これ、やっといってください”

なんて普通言つか!?

そんなに羨ましかったのか

私が刹那と踊るのが?

確かに石田 刹那は教師に絶大な人気を誇る生徒だ

保志、石田(弟)、刹那の三人は生徒だけじゃなく教師にも人気がある……

今のうちにツバつけて置かなくては……

間に合うのかな?

s i d e  
e n d

待ち合わせ時間を五分たった

遅いな

そんな風に考えていたら向こうのほうから先生が走ってきた

「すっ……すまん刹那!!」

「……気にしてない。」

良かった、何処かで事故でもしたのかと思ったよ

それにしても

「……………似合ってるな。」

「／／／／そ…そうか？そう言ってもらえれば嬉しいが……………」

紫の胸の開いたパーティードレス……

しかし

「先生一体何のコスプレですか？」

総一郎が変わりに聞いてくれた。

「保志（兄）か……さあ？先生達のは勝手に用意されてたからな。私も良く分らん。」

そうなのか……

キンコーン

おっと

パーティーの始まりだ

「……先生」

スツと手を出し

「……行きましょうか？」

「ああ。」

パーティーの始まりだ！！

## 当日（後書き）

これで一応コスプレパーティーは終わりです

もしかしたらまた番外編でこのパーティーについて書くかも知れませんが……本編ではこれで終わりです。

## 小説

晩御飯の後リビングで本を読んでいると

「刹那、今度は何読んでるの？」

桜姉さんか……

「……小説だな、俗に言うライトノベルと言っちゃった。」

「へえ、題名は？」

「……………」

「ねえ題名？」

ヤバイ？

このまま行くと俺がオタクだと言ったことがばれてしまう。（ばれていないと思ってます。）

「……………姉さんが好むような話ではない。」

だから題名なんて気にしないで

「えゝでも弟が何を読んでるのか知りたいじゃん。」

気にするな!!

「……」

「あ、もしかしてエッチいのだった？」

「断じて違う!!」

まあ、ちょっとそんな所がある話だけど…

「なら良いじゃん。お姉ちゃんに教えなさい!!」

だ、抱きついてきた!?

そこまでして知りたいのか?

「うん知りたい!」

「俺……今声にだしてたか？」

たまに姉さんや椿に起こる現象だが……俺って考えてる事が口に出ちゃうのかな？

「出てないよ」

「…………じゃあ何で考えてる事がわかる？」

「お姉ちゃんスキル！！」

……そんなのがあるのは二次元だけだ。

「…………姉さん」

「ムッ…………信じて無いね刹那。よし、見てなさい！！」

何を見せてくれるんだ？

「何を見せてくれるんだ？」

「…………？」

「いや、そんな首を傾げないでよ。今刹那が考えてる事を口に出すだけなんだから」

それって、ある意味俺にとってヤバイものじゃん

「それって、ある意味俺にとってヤバイものじゃん。」

合ってる!!

「合ってる。……どうよ」

「……すごいを通り越して呆れるな」

そこまで人の事を読めるとは……

「じゃあ……俺は部屋に戻る。」

「あ、うんお休み」

「ああ」

良かった……結局題名聞かれずにすんだよ……

恐るべし

お姉ちゃんスキル

## ゲーム その1

さて、今日の学校も終わったし……

家に帰ったら久々にのんびりしますかね

「刹那」

「……………なんですか紫先生」

ああ……………のんびりできる気がしない……………

「ちょっと手伝ってほしいことがあるんだが……………」

「……………良いですけど」

何を手伝うのか教えてほしいな

「実は……………」

ん？

周りをキョロキョロと見回しなにかを警戒するような仕草を見せる  
紫先生

どうしたんだ？

「私と一緒に狩りに付き合ってくれ！..」

は？

「.....言ってる事が理解出来ないんだが.....」

「実はな 昨日私の大学時代の友達と会ったんだが..みんな今モンハンにはまっているらしくてな。今度皆で集まって狩りに行く約束をしたんだ」

「それで？」

「私だってモンハンをやったことが無いわけじゃないんだが……如  
何せん随分とやっていないからな、勘を取り戻したいんだよ。」

一人でやれば良いんじゃないか？

「最初は一人でやって勘を取り戻そうとしたんだがやはりマルチプ  
レイのほうがな…（一人でやるのって悲しいし……）」

まあ理由はわかったな

「……良いですよ。付き合いましょう。ただし……学校でやるのは  
ダメだ」

「ならどこでやるんだ？」

「……俺の家」



## ゲーム その2（前書き）

……最近全然更新できて無いです

すいません

言い訳になりますが部活、テスト、就職の場所探し……これらのせいで時間がなかなか取れないので

テストは一応今週の金曜日に終わりますが、部活がこれから6月の大会まで忙しくなるのでなかなか更新はできないと思いますが暇を見つけて書いてはいますので

これからもよろしく願います

## ゲーム その2

「……ただいま」

「お邪魔します」

「お帰り兄さん……と紫先生？」

彰か……

「なんで先生がいるの？」

「ちよつとな……」

モンハンやるためとは言えないよな

「今から俺の部屋で二人でやることがあるんだ。だからな……」

すると彰は顔を赤くしながら

「二人でって……兄さん！！椿や絆ちゃんはどうするのさ！？／／／／」

椿に絆？

モンハンをやるだけなのに二人に関係あるのか？

無いよな？

「……あの二人は関係ない」

「な！？」

「あゝ、石田（弟）？何か勘違いしてないか？」

「紫先生！！あなたは教師でしょ！！なのになぜ」

「私は刹那にゲームを手伝って貰っただけだぞ」

「　　っえ？」

おゝ、彰のあんな惚けた顔久しぶりに見たな

それより

「……良いのか？」

ゲームのこと話しても

「別に内緒だった訳じゃないからな」

「そうか……彰も一緒にやるか？」

人数は多いほうが楽だからな

そして俺たち三人は夜10時までずっとモンハンをやっていた



## 四字熟語

「ねえ刹那くん。あなたの好きな四字熟語ってなに？」

学校の放課後。

生徒会室

いつも……って言ってもまだ就任してから余り日にちが経っていないが絆が突然そう言ってきた

「……どうした？」

急にそんなことを聞いてきて？

刹那は顔を上げずに書類をこなしながらそう返した。

なにしろ書類の量がなかなかに多いので早めにやって置かないと仕事事が溜まる一方だからだ。

「ほら、いろいろあるでしょう。漢字四文字でことわざみたいにするんな意味があるアレ」

「……」

つまり自分が好きな四字熟語を言えば良いのか

「……なら“晴耕雨読”だな」

「それはダメよ刹那」

急に現れた椿がNGを出した

「……」

何故だ？

「何故だ？つて顔をしてるわね。簡単よ。刹那には似合わないから」

「ならなんなら良いんだ？」

「そうねえイメージに合わないのならいっぱいあるんだけど……例えば“権謀術数”とか“傍若無人”なんて合わないのなら簡単なんだけど」

「……イメージに合う四字熟語の話だったのか？」

「え？私そう言わなかった？」

「好きな四字熟語って言ったから……」

「その二つって大体同じ意味だよ」

絆……

お前って以外に抜けてるところあるな

「フム……なら“天真爛漫”」

「だからイメージに」

「絆のイメージだ」

「え？」

「椿は“理路整然”だな」

「へえ」

「違う！！椿なら当然“月下美人”！！」

……総一郎

お前何処からわいた？

「なにか今失礼な事を考え無かったかい？」

「気のせいだ」

しかし月下美人ねえ

確かに綺麗ではあるが……

「四字熟語じゃないなそれ」

「うん、花の名前だね。」

「まったく何を言ってるのよ総一兄さんは……」

俺、絆、椿の三人でツッコミを入れられる

「なんだ、それならそうと言ってくれよ。じゃあ僕はなにかな？」

……総一郎、話に入ってくるのは良いが

「……手を動かせよ」

「分かってるよ」

「それにしても総一兄さんですか……うゝん…馬耳東風」？」

「保志くんか……えゝと…傍若無人」？」

「………唯我独尊」でも良いな」

「なんか皆酷くない？」

そう言いながらちよつと落ち込み始めた

まあでも

「……勝手に物事決めたりするからな」

「ちなみに僕は”独断専行”だと思うけど」

「……彰」

居たのか？

「最初から居たわよ刹那」

「…全然気づかなかった」

「じゃあ刹那さんのイメージは……」

絆が話を最初に戻し  
皆が考え始めた

ちなみにちゃんと皆考えながらも手は動かしている

「“八方美人”なんてどうだい？」

総一郎がそう言う

「“それだ／＼です！”」

他の三人は声を出して感心した

俺って八方美人なのか

「だって不特定多数の人にモテるじゃない？」

…椿

「ホントですよ！！椿ちゃんだけでも大変なライバルなのに（ボソッ）」

……絆

「確かに兄さんはモテるからね。今僕が知ってるのは三人だけだけど」

……彰

俺は

「……モテないぞ」

「それは君が気づいて無いだけ」

そんな事あるか

こんな痛い子（自分で言うのもなんだけど）好きになる奴なんかいるわけ無いじゃん

それに

「……八方美人」の意味はモテるって意味じゃないぞ」

「……え？そうだった？」「……」

お前らホントに学生か？

こうして1日かけても刹那のイメージに合う四字熟語は見つからなかった

刹那の夢？（前書き）

あくまでも夢です

刹那の夢？

「アロウン……」

柄の部分に赤く輝くクリスタルのついた細身の剣に、

黄金の髪ををなびかせた白い鎧を着た女剣士は、別れの痛みを隠しきれない声で呼びかけた。

「アロウン、私は……」

『悲しむな、リアン』

優しいが、強い意思を感じさせる声が、彼女の手になっている剣から発せられた。

だが直径がハメートルを超す巨大なクリスタルの周りに集まった者たちのなかで、誰一人、それを不思議に思うものはいなかった。

“神代のクリスタル”と呼ばれるクリスタルには、すでに三本の剣が突き刺さり、共振を始めている。

空中都市“エアリアル”のコアである巨大クリスタルを破壊すれば、

天を覆い尽くし、今にも世界中の全てを包みこまんとするこの偽りの大地を宇宙に飛ばす事ができる

だがそれは、長い間、共に戦ってきた戦友との永遠の別れを意味していた。

『リアン。お前は強く……とても強くなった。あの天界王を自称する“アースナル”を倒すほどに……』

「でもそれは、アロウンが」

いてくれたからだよ

そう続けようとした彼女の言葉を遮り

『それは違う』

父が娘を諭すようにアロウンは言った。

まるで顔が見えたら微笑みが浮かんでいるような声音で

『お前が奴を倒せたのは、この私 インテリジェンスソード“アロウン”があつたからではない。所詮ただの剣だからな。おまえだから リアン・ハーティリーだから、奴に負けなかったのだ。』

「そんなことない……そんなことないよお……」

リアンは、いやいやをする子供のように首を振った。

その様子に、アルファード神殿の司祭服を纏った青髪の青年は、眼鏡の奥に浮かんだ涙を拭い、白髪の少年は目を伏せた。

だが、その二人の間からショートカットの銀髪を揺らしながら、軽装の青年が一步足を踏み出した。

青年は黒と赤の手袋を握りしめて拳を作ると、それでいきなりリアンの頭を殴った

「リディアさん！」

白髪の少年が、驚きの声を上げて駆け寄ろうとしたが、青髪の青年はそれを無言で止めた。

リディアと呼ばれた青年は、リアンの鎧の首もとをつかみ、彼女の顔を無理矢理上げさせた。

「いい加減にしろよリアン！おまえだけが悲しいと思ってるのか！俺やラステイやライトは平気だと思ってるのか！？みんな悲しいに決まってるだろ！だけど、それでも、大事な人や守りたい人や大好きな人たちを守るために、それを超えようとしてるんだろ！

！それなのに……お前はッ リアン・ハーティリー！！」

そこで声を上げたリディアにリアンは怯えた。

「お前は……何をしている？お前にも守りたい人が、この世界にいるんだろ？そうじゃないのかリアン！？」

リディア・パーシヴァルは力なく膝をつきながら

どん

とリアンの胸甲を軽く叩いた。

「俺だって……俺だって、できるなら、リリスと別れたくないさ……でもこの下には、俺の大事な家族チビたちがいる！お前との旅で出会った……いや、お前と会う前から出会ったみんなもいる！他にどうしようもないだろ！」

うつむいたリディアの赤い瞳から、ツーと涙が流れた

『ありがとね、リディア』

クリスタルに刺さった片刃の剣……と言うよりも刀というのにふさわしい剣 インテリジェンスソード“リリス”が、そう呟いた。

リディアは顔を上げて“彼女”に手を伸ばしかけ、それを止めて拳を握りしめるようにした。

そしてその拳の上に、涙が落ちる

『それでいいんだよ。大好きだよ、リディア。私の……愛しい人』

リディアは嗚咽を漏らした顔を“神代のクリスタル”から反らした。

これ以上、涙を見られたくないかのように……

『わかってくれ、リアン』

アロウンの声にリアンは顔を上げた。

その瞳が、驚きに大きく見開かれた。

彼女の目は、クリスタルの光に照らされた剣の背後に黒髪の若い青年の幻影を見ていた。

若い青年は、黒い見慣れぬ服を着て、微笑んでいる。

「ア、アロウン……？」

だがそれが見えているのはリアン一人だけなのだろう

他の誰にも同様はなかった。

アロウンは静かに続けた

『リアン、リディアの言う通りだ。ここで“神代のクリスタル”を破壊しなければ、全てが無駄になる。私たちの二千年の生を、生きた理由を……無駄なものにさせないでくれ　我が遣い手よ』

「アロウン……」

リアンは剣を握ったままうつむいた。黄金の髪に隠された奥で、クリスタルの光を受けて、涙が光った。

不意に“エアリアル”の振動が激しくなり、白髪の少年　ライト・イシュタールの表情が不安に曇り、司祭服の青年　ラストイ・エルリックの顔が陰しくなった。

偽りの大地の落下まで、おそらくもう、時間はない。

だが、彼らは長く待つ必要はなかった。再び顔を上げたリアンの表情からは、迷いが消えていた

「……わかったよ、アロウン」

リアンは立ち上がると、剣を持ち直し、切っ先をクリスタルに向けた。傷ひとつない刃が光を受けて美しく輝く。

その光景を周りの人達は神代の女神の様だと錯覚させられるほどに…

『そう、それでいい。やってくれ。そしておまえたちが、クリスタルに代わる、新たな世界を導く光となるんだ　英雄という光に』

柄を握る手に、リアンは力を込めた。

「アロウン……私、絶対に忘れない。あなたのことを。無力だった自分のことを。私は、英雄なんかじゃない。リアン・ハーティリーは、友達を犠牲にしなければ、好きな人<sup>アロウン</sup>を犠牲にしなければ世界を救えなかった、情けないよ。だから　私は、その事を絶対に忘れない。」

『……ありがとう。戦友よ』

まるで目をつむるかのようになり、アロウンは剣のクリスタルの輝きを小さくした

「うわああああっ！」

リアンは切っ先を“神代のクリスタル”に突き立て、一気に押し込んだ。

チュン……チュン

夢？

「……………」

なんだ！！今の恥ずかしい夢は！？

厨二か？

厨二なのか!?

あり得ないだろ

なんだよアロウンって!!リディアとか誰だよ

自分で見といてなんだけど恥ずかしいよ!! / / / /

「……刹那〜朝だよ〜お姉ちゃんが起こしにk……………」

只今の刹那の格好は朝からいきなり悶えまくってる人です。|| 変態?

「いゝ、ごめんね。お姉ちゃん……………なにも見て無いから」

そう言っただアをしめて帰っていく

ご、誤解だああああ!!

その日の朝食はとも気まずかった

初めての……

生徒会室

そこは学校の生徒たち選ばれた大事な仕事をする人が集まる場所である。

そして今日もまた

生徒会メンバーが集まる

「せーっとなあ」

「……どうした椿」

「もうすぐさあ、刹那の好きなアニメが始まるよね？」

ん？カスタムUCの事か？

「……それがどうかしたのか？」

別に新しいアニメが始まるなんてそう珍しい事じゃないだろ？

「実はね……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「早く言え」

なぜそんなに間をあける

「テレビ放映が始まる前に第一話が見られるとしたら……どうする？」

そんなの

「……見る」

そんなことを言っつてことは見れるのか！？

新しいカスタムシリーズが陽の目を浴びるより先に見れるのか？

「そう、見れるのよ……これさえあれば」

そう言って椿が手に出したものは一枚のチケットだった

「これ欲しい？」

「…………（コクッ）」

喉から手が出るほど欲しい！！

「あげても良いんだけど…………只じゃあね……………」

「…………何でもしよう」

俺がそう言った瞬間椿の目が一瞬だが光ったような気がした

「なら今度の休日デートして」

「ああ！！……………え？」

デートって

あの男女が二人きりで遊びに出掛けたりするあれか？

まあ椿の事だ

買い物荷物持ちをやって事ぐらいだろう

それぐらいなら

「……………引き受ける」

「ヤッター！！じゃあ今度の休日の朝に刹那の家に行くね。あ、ハ  
イコレ」

そう言って俺にチケットを渡して椿ははなれていった

やったぜ

これでカスタムUCが見れる

明日の夕方に見に行こう

## 椿と彰（前書き）

前回のチケットの入手した椿の話

椿と彰

「椿」

「なに彰？」

「コレいらない？」

「チケット？でもなんの？」

「カスタムUC第一話先行試写会のチケットだけど……」

「はあ、そんなの刹那にあげなさいよ。その方が喜ぶわよ。」

「良いの？俺の手から渡して？」

「……どういう意味よ？」

「コレを兄さんに椿から渡せば上手くやればデート出来るかも知れないの？」

「……………（悩み中）」

「それでも良いんならコレは俺の手から……いや鈴波さんに渡そうかな？」

「…………う」

「え？」

「私が貰う!!」

「最初からそうすれば良いのに…………ハイじゃあコレね。」

「…………ありがと／＼／／」

「どういたしまして。じゃあ頑張つて。」

刹那、もしくは総一郎がこの場にいない為会話文のみ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0383p/>

---

とある家族の非日常？（もしくは只の日常生活）

2011年7月6日07時46分発行